

「我が為した・他が為したを考察する第十二章」

論証する理由を否定する>依るものである苦しみが有る理由を否定する> [章の著述を説く]

ここに言う。「我はまさしく有る。(何故ならば) それと関係を持つ苦しみが有る故である。ここで、近く取る五蘊を『苦しみ』と述べた。それも存在するが、その苦しみの何ものかに変化せられなければならない、拠所無くしてではない。それ故に、苦しみににはまさしく拠所が有るのであるが、それも我である。」

章の著述を説く>苦しみが自性として有ることを否定する> [主張命題を挙げる]

述べよう。もし、苦しみそのものが有るならば、我が有ることとなるが、有るのではない。このように、「それが有るならば、我が為したか、他が為したか、双方が為したか、因と離れたものになるものであるが、主張するとしても、一切の様相においてそれがまさしく為したことは有るのではない。」と示す為に、

或る者は、「苦しみは、自らが為した」
 「他者が為した」「双方が為した」
 「無因より起こる」と主張する。
 それは、為されるに適さない。 1

と説かれた。そこで、或る対論者が「苦しみは我が為した。」と考える。他の者達によっては、他が為したものであるが、他の者達によっては、双方が為したのであり、幾らかの者は「苦しみはまさしく因無くして起こるのだ。」と考える。主張となったその苦しみの、一切の様相において「為される」－「生じさせられるもの」¹であるとは適さない。

苦しみが自性として有ることを否定する>理由を示す>苦しみは自他各々が為したことを否定する>苦しみを基として、自他各々が為したことを否定する> [苦しみを基として、自らが為したことを否定する]

これは主張命題のみであり、それが証成される為、

もし、我が為したとなれば、
 それ故に、依拠して起こるとはならない。
 何故ならば、これらの蘊に
 依拠してこれらの蘊は起こる。 2

と説かれた。そこで「我が」とは、「我、自らが」という意味である。

¹ 「生じさせられるもの」：結果の定義。

もし、我が苦しみを為したことになるれば、苦しみの自らの本質そのものが、苦しみ自らの本質そのものを為したとなるだろう。それ故に、依拠し関係して起こる（縁起生）とはならない。「因と縁に相互関係せず起こるだろう。」という意味であり、自らの本質として有る故である。有るのでないものが、自らの本質を為すのではない。

これは、縁起生でもあり、このように、

「何故ならば、これらの蘊に依拠して、これらの蘊が起こる」
故であり、何故ならば、死ぬ時のこれらの蘊に依拠して、生の部分に結ばれるこれらの蘊が起こる故である。それ故に、「苦しみは我が為した。」とは、正しくない。

苦しみを基として、自他各々が為したことを否定する> [苦しみを基として、他が為したことを否定する]

ここで、「他が為したことも、有るのではない。」と説かれた。

もし、これよりそれは他であり、
もし、それよりこれが他であるならば、
苦しみは、他が為したとなり、
それらの他が、それを為したとなる。 3

もし、死ぬ時のこれらの蘊より、生の部分となるそれらの蘊が他となり、生の部分に結ばれるそれらより、死ぬ時のこれらの蘊が他であるならば、その時苦しみは他が為したとなるが、それらにおいては、まさしく他であると見られない。（何故ならば）因と果の関係性に留まることが無い故である。

「何かに依拠して何かが起こる。それは先ず、まさしくそれではない。

それより他でもない故に、それ故に断滅ではなく、恒常ではない。」²
と説かれるであろう。それ故に、苦しみは他が為したことも、有るのではない。

もし、まさしく他であるならば、その時「他そのものであるので、他となったそれらの蘊が、他となったそれらをして為した。」と述べられることができるとなるが、それはそのようでもない。それ故に、苦しみは他が為したことも、有るのではない。

苦しみは自他各々が為したことを否定する> プトガラを基として、各々が為したことを否定する>

[プトガラ自らが為したことを否定する]

『何。何故ならば、苦しみそのものが苦しみを為した故に、〈自らが為した。〉
とは言わぬ。ならば何かといえ、プトガラ自らが、まさしく我であるものに

² 「何か…ではない。」: 『根本中論』第 18 章 10 偈。

よって為したのであり、他が為してこの者に与えたのではない。それ故に〈苦しみは我が為した。〉と言う。』と思えば。

述べよう。

もし、プトガラ自らが、
苦しみを為したならば、我であるものが
苦しみを為したプトガラは、
苦しみ以外の何ものであろうか。 4

もし、「近取の五蘊という定義を持つ、この人間の苦しみは、プトガラ自身が為した。」と考えるならば、我がその苦しみを為したという、そのプトガラを勿論考えるだろう。

もし先ず、ある苦しみによってそのプトガラ自身であると名付ける、まさしくその苦しみが、それによって為されたのであれば、「その苦しみとはこれであり、この行為者はこれである。」と分けて述べられなければならない。

もしまた、人の苦しみの近取を持つプトガラが、天の苦しみを為したとなれば、あるいはそれは、プトガラ（我）自身が為したのではないが、まさしく他のプトガラが為したとなる。

もし、近取が別であろうともプトガラは不別であると主張すれば、これも有るのではない。（何故ならば）近取より別であり、他となったプトガラは示されることができない故である。そのようであれば、先ず、苦しみはプトガラ（我）自身が為したのではない。

プトガラを基として、各々が為したことを否定する＞ [他のプトガラが為したことを否定する]

ここで言う。『プトガラ自らが苦しみを為した。』と誰が言おうか。ならば何かといえ、苦しみとは他のプトガラより起こったのである。このように、人であるプトガラとは、天の苦しみよりまさしく他であるが、何故ならば、人であるプトガラによっても、天の苦しみを為して天であるプトガラに与えることをし、その天の苦しみによっても『天のプトガラである。』と名付ける故に、そのプトガラのその苦しみは、他のプトガラより起こるのである。」

述べよう。

もし、他のプトガラより
苦しみが起こるならば、

その苦しみを為して与える他者が、
苦しみ以外に、如何様に適おうか。 5

もし、「天の苦しみは人であるプトガラが為したが、その人であるプトガラもその苦しみを為して、他である天のプトガラへ与えることをする。」というのであれば、それに対して与えられる天であるそのプトガラは、天の苦しみ以外に如何様に（存在が）適うとなろうか。そのようであれば、先ず、他のプトガラより起こった苦しみにいて、受け取る者自身が有るのではない。

ここで、「その与えるものも有るのではない。」と説かれた。

もし、他のプトガラより苦しみが
起これば、それを為して
他者に与える他のプトガラは、
苦しみ以外の何ものであろうか。³ 6

何者かが天の苦しみを為して、天であるプトガラに与え、或る近取によって「人であるプトガラ」と名付けられるそれは、人の近取より別の、何であるとなろうか。それ故に、他のプトガラより起こった苦しきも、有るのではない。それ故に、

我が為したと成立していないので、
苦しみを、他者が何処で為したのか。
他者が苦しみを為すとは、
それは、その我が為したとなる。 7

もし、天であるプトガラの苦しきは人であるプトガラが為した故に、他が為したのであるならば、それは、まさしく人であるプトガラ自らが為したとなるが、「それも有るのではない。」と前述した。

それ故に、「我が為したと成立していない故に、その苦しきを人であるプトガラの我が為していない時、『天』という他のプトガラの苦しきが、他者によって為されたと何処でなろうか。」というこれよりも、苦しきは他が為したことは有るのではない。

³ もし…あろうか。：新訳（パツァブ訳）『根本中論』第 12 章 6 偈にあるが、『ブツダパーリタ』には無い。

苦しみは自他各々が為したことを否定する> [自他各々が為していない他の理由を示す]

ここで双方ともに、他の様相の面からも有るのではないと示す為に、

先ず、苦しみは我が為したのではない。
 それ自体が、それを為していない。
 もし、他の我が為していなければ、
 苦しみは他者が為したと、何処でなろうか。 8

と説かれた。これよりも、苦しみは我（自）と他が為したとは正しくない。

何故ならば、先ず、苦しみは我が為したのではない。何故かといえば、何故ならば、それ自体がまさしくそれを為したのではない故であり、我そのものに対して行為することは矛盾する故である。それ故に、我が為したことは有るのではない。

他が為したことも有るのではない。何故ならば、「為す。」と考察される他であるもの自体は、先ず、我が為しておらず、我そのものとして成立していない。

（何故ならば）それも他の因に相互関係した故である。自らの我性として成立したのではないものは、有るのではない本性となったので、他が為すと如何様になろうか。これは正しくない。

理由を示す> [二つの集合が為したことと、無因であるという言説を否定する]

ここで、「苦しみは双方が為したことも有るのではない。」と説かれた。

もし、各々が為したとなれば、
 苦しみは双方が為したとなる。

もし、各々が苦しみを為すとなれば、その時には苦しみは双方が為したのであるが、それは各々が為したのでもない。（何故ならば）既に説いた過失となる故である。各々が殺生を為しておらず、「双方が為した。」と述べられることは見られない。

ここで、苦しみは無因より起こったことも、如何様に無いかと示す為に、

我が為さず、他が為さなければ、
 苦しみが無因であると、何処でなろうか。 9

と説かれ、他によって生じさせられていない、他が為していないものが、ここ

に有るので、「他が為していない」である。ここで、我が為していないものがあるので、「我が為していない」である。

もし、斯くも説かれた論法で、苦しみは我が為したことが無く、他が為したことも無い時、無因が有ると何処でなろうか。虚空の花の良い香りの如くである。苦しみは無い故に、その拠所となった我も、何処に有ろうか。

章の著述を説く > [その正理を他の現象にも適用する]

「斯くも、四様相において分析したならば苦しみは有るのではないが如く、外界の事物である種子と芽や、壺と絨毯について等も知りませ。」と示す為に、

苦しみのみが、四様相として
有るのではないのではないけれど、
一切の諸事物においても、
四様相は有るのではない。 10

と説かれ、一切に前述の如く当てはめたまえ。

もし、「これらの苦しみ等に四様相が無ければ、ならばここで、これらは如何なる様相によって成立するのか」といえば。

述べよう。もし、これら苦しみ等が本性として有るとなれば、確実にこれらの四様相より何れか一つとして成立することになるものであるが、(それは)有るのではない。それ故に、苦しみ等は本性として有るのではないと確認する。

あるいは、ただの誤りだけで我性が有ると見出し、苦しみ等世俗(全て偽り)において、依拠し関係して起こる(縁起生の)構成を探求するならば、その時、能作(行為の対象)と行為者を考察した章において説かれた様相によって、斯くも言及した四説を斥け、縁そのもの、ただこれだけの意味である縁起生が成立したと承認したまえ。

斯くも、

『苦しみは我が為した』『他が為した』『双方が為した』『無因である』
と論争者は主張する。貴方は依拠して起こると説かれた。」

と説かれた。

依るものである苦しみが有る理由を否定する > [了義の教証と合わせる]

世尊も、

「世俗として勝者は法を説かれた。有為無為⁴であり、そのように相対する。清浄そのものとして我と有は無く、全ての衆生の性相はこれに似る。善悪の諸業は壊れず、我が為したことは我が経験することになる。業の果が移行するとはならず、無因であるとしても経験することにはならないだろう。一切の有（輪廻）は幻であり、自在ではない。空虚で空殻となった水面の気泡の如くである。幻や逃げ水のように常に空っぽである。声音によって説かれても、それらは遠離している。洞窟と山や、深谷や河谷等で、縁によって斯くもこだまが起こるように、その如く、この全ての有為を知りたまえ。一切の衆生は幻や逃げ水の如くである。」

等と説かれた。

依るものである苦しみがある理由を否定する＞ [章の名を示す]

阿闍梨月称の御口より綴られた頭句より、「我が為した・他が為したを考察する」という第十二章の解説である。

DECHEN 訳

⁴ 有為無為：自らの因縁（原因と条件）によって生じたものと、そうでないもの。
[第 1 章] 脚注 47 参照。